

考古学者 原田大六論(一)

——中支那派遣憲兵隊入隊から敗戦まで——

菊池 誠 一

はじめに

昭和六〇(一九八五)年五月二八日、朝日新聞をはじめ主要新聞は、前日、脳梗塞で死去した考古学者原田大六の顔写真とその業績をつたえた。享年六八歳であった。

大正六(一九一七)年生まれのため、大六と名づけられた原田は、青春を軍隊生活で奪われ、戦後は元九州帝国大学医学部教授で考古学研究者としても名高い中山平次郎に師事し、三〇歳から考古学を本格的に学んだ在野の研究者であった。その研究業績は、日本考古学研究、日本神話研究、万葉集研究、そして方言研究と多方面にわたっていた。

初期の論文「福岡県石ヶ崎の支石墓を含む原始墓地」は昭和二七(一九五二)年、三五歳のときに『考古学雑誌』(第三八巻四号)の巻頭に掲載されたが、これはわが国における支石墓研究の嚆矢となった。昭和二九(一九五四)年に処女出版『日本古墳文化―奴国王の環境』(東京大学出版会)を刊行し、死の前年、昭和五九(一九八四)年に刊行された『阿弥陀仏経碑の謎―浄土門と宗像大宮司家―』(六興出版)まで、一九冊の単著と二冊

の共著、そして死後関係者の努力によって、さらに二冊の本が追加された。そのなかには、昭和四四(一九六九)年に出版された『邪馬台国論争』(三一書房)のように、ベストセラーになったものもある。

かれの研究は、日本国家の起源を解明することに集約され、そのために弥生時代から古墳時代をあつかった論文をやつぎばやに発表した。一方、かれは考古学研究だけではなく、その成果をもとに万葉集や日本神話研究まで研究領域を広げていったことでも特色があった。そうした研究成果を称して、「原田学説」とよばれた。

かれには頑固一徹のところがあり、「官学」に真っ向から挑戦したため、「ケンカ大六」として恐れられたが、反面、考古学を学ぶ学生や一般読者を魅了した半生であった。

筆者は、考古学者原田大六の業績を日本考古学研究史上に位置づけ、かれの提唱した「原田学説」を今日の研究視点から振り返るとともに、その半生をたどってみようとするものである。まず最初に、敗戦時に中国武昌の捕虜収容所で歴史学研究を決意した時期に焦点をあてたい。そのため、本稿では、昭和一七(一九四二)年に中支那派遣憲兵隊に入隊し、敗戦にいたるまでの時期のかれの行動を同期生たちの証言をもとに追ってみたい。

その時期のかれの行動や心の動きを明らかにすることは、後に著名な考古学者となる原田大六という人間を理解するうえで重要な意味をもとう。

なお、文中の敬称は略し、引用文の明かな誤字・脱字は訂正した。

一 中支那派遣憲兵隊に入隊

主に新聞記事を集めて編集された『原田大六論』の「原田大六先生年譜」は、かれ自ら執筆したものであるが、昭和一六（一九四一）年一二月に「召集され華中に出征」、同二〇年に「華南衡陽にて敗戦をむかえ、歴史学研究に打ちこむことを決意する」、そして翌二一年の年末に復員とある⁽¹⁾。敗戦時に歴史学研究に打ちこむことを決意したという。

昭和一六年一二月、再度召集されたかれは、憲兵隊を志願した。年明けには、二五歳になろうとするときであった。憲兵隊を志願した理由として、後年のかれの談話によれば、

日本人ってのはでたらめだと怒ったんたい。何のためにこんな虐殺しなきゃならんのかって。それで憲兵軍曹になったと。

つづけて、

普通の兵隊にしろ、憲兵にしろ、なにかと言えば制裁を加える。おれはそれがいやだったのだ。取り締まる側ならやらんでもよからうって⁽²⁾。

とものべている。イトノ夫人にも「あまりにも日本兵が悪いことをするか、憲兵になった」と話されている。

かれは憲兵選抜試験をうけ合格し、中支那派遣憲兵隊教習隊に入隊する。教習隊の設営地は南京市大石橋鐘山にあり、「鐘山教習隊」とよばれてい

た。この教習隊の同期生であった笹木幸治の証言によると、かれは「憲兵になれば生き残れる」という思いをもちたという。

昭和二三（一九三八）年の最初の召集で福岡第二十四連隊に入隊し、「満州」（現、中国東北地区）に派遣された。一般部隊にいたかれは戦闘経験もあり、戦友の死を見とどけている。また、軍隊内における陰湿な制裁現場を体験、あるいは見聞していようが、かれ自身は下級兵に対して制裁を加えたことがなかった、と、当時初年兵であった黒木正男の証言がある。原田は軍隊内で出世する気持ちはもうとうない万年以上等兵であった。

一般的に憲兵志願者は旧制中学校や大学卒のインテリがおおかった。このことに関して「計算ずくでの志願が多かったのではないか」、との証言もある⁽³⁾。

おそらく、かれは日本兵の中国人に対する悪行やすさまじいリンチの横行する軍隊社会を嫌悪し、非戦闘員であり、前線に立つことが少なく、生きのこる可能性が高い憲兵を志願したのではないだろうか。

ではここで、憲兵の職務について簡単にみてみよう。

憲兵は軍事警察権と行政警察並びに司法警察権をもち、戦地における憲兵は軍令憲兵と称し、作戦司令官の指揮下にあり、作戦要務令や野戦憲兵隊勤務令という軍令で活動した。作戦要務令に示す憲兵の任務としては、軍機の保護、間諜の検索、敵の宣伝および謀略の警防、治安上必要な情報の収集、通信および言論機関の検閲取締り、敵意を有する住民の抑圧、非違および犯則の取締り、酒保および用達商人等従属者の監視、旅舎・郵便局・停車場の監視、などであった⁽⁴⁾。

こうした任務は、植民地や占領地において独立運動や「抗日運動」の取締り、弾圧になってあらわれ、アジアの各地では「ケンペイ」という言葉

がそのまま通用し、恐れられていた。また、逆に兵士にとっても一人前の憲兵になるために、拷問の手ほどきをうけ、そのときが最も衝撃的であった、という証言もあり、⁽⁵⁾ 忠実で奴隷的な兵士を養成する日本軍隊の特質をみることができるといえる。

ところで、志願兵全員が憲兵になれるというわけにはいかない。それ相応の試験があり、これに及第しなければならぬ。

笹木幸治の証言から憲兵になる道筋をみてみよう。氏は大正二一（一九三二）年、宮城県生まれで昭和一六年に仙台東部第二十二部隊に入隊し、翌年に中支那派遣第一〇四連隊に編入、その年に師団司令部で中支那派遣憲兵隊の憲兵教習兵選抜試験を受ける。一般部隊におおむね九ヶ月以上在籍しなければ、受験資格がなかった。選抜試験は、小学校卒であろうが学歴による差別はなく、氏の連隊から一〇〇名くらいの希望があったが、試験に合格したのはたった二名であり、教習隊に入隊半年後の試験ではかれ一人が合格しただけであった。

試験は通常、科目・常識・読書力・作文・筆跡・数学等である。⁽⁶⁾ このときの数学の試験はピタゴラスの定理だった、と笹木は記憶している。合格者はおおよそ三八〇名であった。教習隊入隊後の半年後にまた試験があり、それに合格しなければ不適格者となり、それは教習生にとってみじめな原隊復帰となる。三八〇名がそのとき二〇〇名になっていたという。

原田もこの選抜試験に合格し、同年一月、鐘山教習隊に入隊、笹木と同期の第七期生となり、かれと同室となった。教習隊での勉強は、厳しいものであり、あの時期ほど勉強したことはなかった、と笹木はいう。教育内容は、学科が法学概論、軍刑罰法、警察法、秘密戦、刑罰法規、刑事訴訟法、司法、経済学、科学、そして中国語などであった。中国語は毎日あ

り、半年間ずつ日本人と北京語を話す中国人が教えた。科学の講義は、死体観察法であった。ほかに柔道、剣道、馬術、捕縄術、刀・拳銃の操法などの術科があった。午前七時起床で、防具をつけ三〇分ほど剣道の練習、七時半から朝食、八時から一科目九〇分の講義が講堂であった。午後四時ころまで講義がつづき、その後は術科の時間となる。

勉強はほとんどが丸暗記するもので、夜九時に消灯となるが、その後は明かりをもとめて廊下や便所、はては馬屋の明かりの下で勉強した。しかし、日直下士官にみつければ怒鳴られ、床につく。試験二ヶ月前からは、夜一時まで勉強がみとめられ、激しい勉強がなされていた。

原田もこのような日課と猛勉強をこなしていた。柔道や剣道などの術科は、二五歳という教習隊内で一番の年上であり、体がすでに硬くなっているためか、あまり得意ではなかった、と教習生でありながら柔道二段のため同期生を指導していた笹木はいう。

教習隊入隊後の半年後に試験がある。さきにのべたように、この試験に合格しなければ、原隊復帰となる。この試験問題については、教習隊七期生のひとりが戦後まで保管しており、その問題を知ることができる。教習隊七期生がうけた試験は表一のような内容であった。

試験に合格した原田や笹木らは、昭和一八（一九四三）年六月一九日に教習隊第五大隊長である植木鎮夫憲兵中佐から卒業証書を授与され、憲兵兵長となった。そして、原田は上海憲兵隊付け、笹木は九江憲兵隊付けとなり、赴任した。

上海での活動の様子を知る手がかりがほとんどないが、かれの著書『実在した神話』のなかに、昭和一八年の上海でのことが記されている。そこには、

表一

秘密戦勤務試験問題	
第一問題	秘密戦ノ意義及特性ヲ問フ
第二問題	敵側各種謀略警防上ノ一般的手段方法ノ項目ヲ列挙セヨ (以上一時間十分)
司法実務試験問題	
第一問題	被告人取調上ニ於ケル一般的注意事項ヲ述ヘヨ
第二問題	聴取書ト訊問調書ノ異同点ヲ述ヘヨ (以上一時間十分)
保安勤務試験問題	
第一問題	保安勤務ノ要則ヲ述ヘヨ
第二問題	課者監督手段ノ主ナル事項ヲ列挙セヨ (以上一時間十分)
基礎科学試験問題	
第一問題	指紋ノ現出、採取、保存要領ヲ簡單ニ箇条書ニ説明スヘシ
第二問題	左ノ事項ヲ図示説明スヘシ (1) 中核蹄線 (2) 孤状線 (3) 介在線 (4) 双蹄蹄状紋 (5) 甲種蹄状紋
第三問題	生前及死後創傷鑑別ノ要項ヲ記載セヨ
第四問題	左ノ創傷ニ依リ凶器ノ種類(鋭器又ハ鈍器)ヲ判定セヨ 挫創 切創 搔創 皮下溢血 刺創 割創 裂創 縛創 機械創 轢過創 (以上一時間十分)
課題作業	
一、問題	自由主義経済ノ誤謬ト欠陥ヲ指摘シ統制経済ノ根本理念ニ論及スヘシ
二、提出期日	五月三日

虹口で雨にあい、北四川路の三通書局にとびこんだ。そこで日本から送られてきたばかりの考古学の書物が目についた。軍服を着ているという身分のことは忘れ、餓鬼のようになって、文字を挿し絵をむさばった。……華南の戦線へ出発する直前……死を覚悟していた者が、なぜ考古学の一頁一頁をむさぼり読んだのか。⁽⁷⁾

とある。軍服を着ている身とはいえ、青少年期に抱いた考古学への想いがじつとさせてはいなかった。

虹口は、現在でも上海市の中心地域にある。魯迅公園から南にのびる通りは、今では四川北路とよばれ、この界限には日本人居留民が住んだ古い建物のがこっている。

二 湘桂作戦に従軍

昭和一八(一九四三)年は、太平洋地域のガダルカナル島で二月に日本軍が敗退し、また五月にアッツ島守備隊の玉砕、そして九月の御前会議で南洋群島からニューギニア西北部、「蘭印」(オランダ領インドネシア)、ビルマを結ぶ線を絶対確保の領域と定め、戦局は日増しに緊迫していった。中国戦線でも、日本陸軍の主力六〇万人が中国国民党軍や中国共産党の八路军との泥沼の戦争から足を抜くことができなかった。占領地域内の維持さえも困難になり、昭和一八年晩秋から、中国大陸を南北に縦断し、「仏印」(仏領インドシナ)を結ぶ大作戦計画の検討がはじまった。この作戦全般を一号作戦(通称「大陸打通作戦」)と称し、華北における作戦を京漢作戦、華中における作戦を湘桂作戦、そして華南における作戦を粵漢打通作戦とよんだ。

作戦の目的は、南方圏域との交通路の確保、東シナ海における海上交通の確保、そして日本本土空襲基地としての中国大陸内にあるアメリカ空軍基地の壊滅であったが、大本営による検討の結果、支那派遣軍に「航空基地覆滅に徹するように」と指示され、昭和一九（一九四四）年一月二四日に大命が允裁されたのであった。⁽⁹⁾

この作戦計画の概要はつぎのとおりであった。まず、昭和一九年四月ころに北支那方面軍は第十二軍の四個師団をもって黄河を渡り、敵第一戦区軍を撃破し、黄河以南の漢口にいたる京漢鉄道を確保、ついで同年六月初頭に第十一軍の八個師団をもって武漢地区より南方にむかい、八月ころ第二十三軍の二個師団をもって広東地区より西方にむかい、敵第九、第六戦区軍を撃破し、湘桂、粵漢鉄道沿線を確保する、⁽¹⁰⁾というものであった。参加総兵力は人員五一万、馬匹約一〇万、火炮一五〇〇門、自動車約一・五万両に達するものであり、日本陸軍はしまつて以来の大作戦となった。⁽¹¹⁾

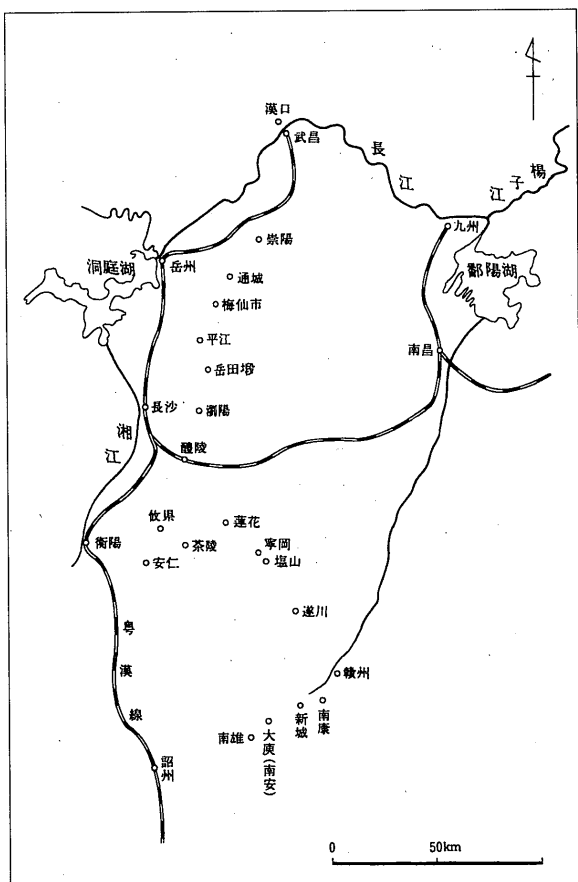
上海に赴任し、憲兵伍長になっていた原田や同期の石田静夫らは、昭和一九年四月四日に漢口憲兵隊転属命令をうけ、かれらは同八日上海駅を出発した。湘桂作戦に参加するためである。制空権を失ってからの奥地への赴任に一抹の不安を感じながら、汽車で南京へ、そこから長江（揚子江）を船で夜間航行し、安慶、九江へとさかのぼり、漢口へむかった。漢口では二〇〇名ほどの憲兵が集められ、戦闘、行軍の訓練をした。このなかには、笹木や島田源吾、谷本兆三の同期生もいた。

漢口憲兵隊長の岡市知足少佐は、当初は憲兵隊単独でこの作戦に参加しようと考えていたが、軍の命令により、憲兵は作戦参加部隊ごとに、一〇〜一五名が配属されることになった。原田と笹木らは七十一兵站到配属、石田らは第三師団に配属がきまり、集結地点である湖南省の崇陽へむかっ

表二（島田源吾著『戦塵』七〇八頁）

兵器
騎兵銃・拳銃（十四年式 弾九十発連射可能）・軍刀・手榴弾二個・弾薬盒前盒二個（一個に三十発合計六十発）・後盒一ヶ六十発（合計百二十発）
被服
軍衣（夏物）上下・略帽（通称戦闘帽）後に日覆あり・襦袢（上下各二）靴下・編上靴・背囊・鉄帽・携帯天幕・毛布・外被（雨合羽）・雜囊（肩掛けカバン）・水筒・偽装網・帶革・兵器手入具一式・防蚊膏・防虫帽
食糧
米（約二升）
その他筆記用具洗面具手拭下帯等

図一 湖南省東部概観図（藤原彰著『中国戦線従軍記』九四頁）



た。任務につくために、表二に示したような装備が手渡された。⁽¹²⁾ 自分の体重よりも重い装備を身につけ、すでに五月になっていた武漢地区は「焼けつくような太陽に重い装具の為卒倒せんばかり」⁽¹³⁾の状態であった。

第十一軍が担当した湘桂作戦で、その兵站線、つまり補給線は岳州から長沙、衡陽にいたる粵漢線沿いの甲兵站線と、崇陽、通城、平江、瀏陽という東部の山岳地帯をつらねる乙兵站線の二本をつくる計画になっていた(図一)。七十一兵站は、乙兵站線を担当した。この乙兵站線の自動車道路構築には、野戦師団の第二十七師団が担当させられ、そのなかには戦後著名な軍事史研究者・一橋大学名誉教授故藤原彰が第三連隊第三中隊の隊長として参加していた。

ところで、笹木や石田、島田らは、同年五月二六日に崇陽からさらに南下して、最前線へとむかい、それぞれの地に憲兵隊を開設していった。しかし、ひとり原田は崇陽に半年間ほとんどどまり、トラック部隊二〇〇台の荷物監視の役目を担った。兵站線の自動車道構築がなかなかできなかったため、崇陽から出発できなかったのである。

石田や島田の手記『湘桂公路』や『戦塵』を読むと、最前線にむかう行軍は、すでに制空権を失っていたこと、各街のいたるところに「打倒帝国主義」等の壁書きがあり、兵士にとっては精神的な負担が大きく、また食糧、とりわけ米と塩が欠乏し、かつ猛暑や豪雨のなかの行軍であったため肉体的疲労も激しく、この作戦で増えた病名は「栄養失調症」であったという。藤原も当時の状況を「肉体的苦勞と栄養不足は、その後多数の栄養失調患者を出す原因となったと思われる」⁽¹⁴⁾と記し、所属した第三連隊の死亡者の統計を示し、戦病死者が戦死者よりもおいことを明らかにしている。⁽¹⁵⁾

乙兵站線は梅雨にはいったこともあり、道路構築は困難を極め、結局は中止になった。崇陽にのこっていた原田は、同年十一月に広西省柳州市に到着し、笹木らと合流した。笹木がこの半年間、崇陽でなにをしていたかと問うと、原田は「毎日、絵を描いていた」とこたえ、五、六冊のノートに描かれた絵をみせてくれた。そのノートには、寺院や古跡が描かれていた。

柳州にあつまった憲兵は、乙憲兵隊本部、あるいは柳州憲兵派遣隊に配属され、本部付けとなるもの、あるいは分遣隊に配属となるものなど、さまざまであった。笹木は柳州派遣隊付けとなり庶務班を担当し、作戦の事務処理にあたった。原田は鹿寨鎮分遣隊に配属となったが、そのおり笹木に任務の交替を頼んだもののかうわけがなく、鹿寨鎮にむかった。原田はなぜ任務の交替を頼んだのであろうか。

乙憲兵隊長は中村正次中佐で、かれは敗戦時に自決するが、著名なピアニスト中村紘子の祖父にあたる。派遣隊の隊長は岡市少佐で、かれは昭和二〇(一九四五)年の元旦、軍服の前ボタンがすべてとれた異様な姿でみなの前にあらわれ、開口一番、

日本は負けるぞ。

といった。つづけて、

米軍は、日本本土を直撃するか、在支米軍を増強して来るか、我々は、ここまで来て敗戦となったら、もう前進も後退も出来ない。各個ばらばらになって洞窟に身を隠す外はない。その時、握り飯を持って来てくれる住民を一人でも多く確保しておけ。終り。⁽¹⁶⁾

というような訓辞をした。なぜ前ボタンがまっただなかつたのか、おそらく前夜、司令部で戦局をめぐって激しい言い争い、つかみ合いがあったの

だろう、と笹木は想像する。

原田は六月ころまで鹿寨鎮分遣隊に赴任していた。そのころ、第十一軍は各部隊や憲兵隊に反転作戦を発動し、武漢に集結するように命令した。兵士たちの間では、それを福建省への転進、あるいは本土決戦のため内地へ移動、と噂されていた。

前線にいた石田は撤退の途次、鹿寨鎮分遣隊にいた原田を訪ねた。久しぶりに再会したかれらは、戦局の話へと進み、原田は、

嘗てない超爆発力を有する爆弾を米国は発明した。⁽¹⁷⁾

と話した。それが原子爆弾であったことは、後に判明するが、敵方への諜報活動で知りえたことであつたらしい。

前線からの撤退はまた悲惨をきわめた。補給はとうに途絶え、ボロボロの服、履きつぶした軍靴は草履をつくって代用とし、また、階級章を失ったり、あるいは進級しても新しい階級章がないため、絵具でそれを描いたという、うそのような話がのこっている。

撤退を知った敵方は執拗に追撃をし、それをさけるように夜行軍となつた。撤退中の八月一五日、笹木は桂林の手前の陽朔付近で通信兵から日本が無条件降伏をしたことを知り、石田は同一八日に知り、愕然とする。一週間ばかり好天にもかかわらず、敵機が飛来せず、友軍のトラックが日中、行動していたことに、石田は一抹の不審をいだいていたものの、敗戦という現実をなかなかうけいれることができなかったようだ。原田は、敗戦を衡陽で知ったという。やはり、撤退の途次であつた。

日本陸軍最大の作戦、一号作戦は、戦没者をもっとも集中し、失敗した。戦没者とはいっても、内実は戦死者よりも病死者がおおく、その死因は栄養失調か、栄養失調と密接な関係にあるマラリア、赤痢、脚気などであつ

た。補給困難による飢餓と栄養失調が体力を消耗させ、多数の病死者を生させたのであつた。⁽¹⁸⁾

三 敗戦と武昌戦犯収容所

かれらは、さらに後方の集結地点である武昌まで重い足を引きずり、露営しながら変わり果てたであろう祖国を夢みた。運がよければ他部隊のトラックに便乗したり、屋根まで兵士でいっぱい列車に乗りこんだが、行軍そのものが馬鹿らしくなるような事態にも遭遇した。それは、食糧をほとんどひとり占めにする軍上級者の道徳的良心の喪失であつた。

石田は、

今にして敗戦の原因を科学戦の弱体に帰するは何ぞ！敗戦こそ、日本の、そして皇軍のその軍人精神、民族思想の当然の帰結というも可であらう。⁽¹⁹⁾

と憤激する。

ところで、湖南省の零陵までたどりつくと、前任の岡市隊長にかわって、柳州派遣隊長になっていた斎藤誠少佐が、各自揚子江を下れるところまで下れ、と命令し、三々五々撤退していった。民船を雇うため、なけなしの金を中国人に支払い、洞庭湖を下っていったが、原田は金がなくて、拳銃を売りさばいた。後にこのことを知った笹木は啞然とするが、その後中国国民党軍に拳銃を接収されたことを考えれば、賢明な措置だったと今では思っている。

武昌につくと、中国国民党軍から漢口に上陸するように命じられた。笹木らは憲兵腕章をはずし日本の鉄道隊に潜りこみ、石田は海軍根拠地司令

部に配属となったが、中国軍側から、

日本憲兵を匿っている部隊は復員を停止する。⁽²⁰⁾

という命令がだされ、迷惑をかけることができず、憲兵は全員捕虜となり武昌の戦犯収容所（あるいは、「集中營」ともよばれた）に入るようになった。

そのころ、蒋介石はラジオ放送で全国民にむけ、

我々、八年間の戦争は、国民の奮闘努力により、今日勝利を獲得することが出来た。日本軍に対しては、怨みに報いるに徳を以てせよ。⁽²¹⁾と報じていた。

原田をはじめ、柳州憲兵派遣隊や漢口憲兵隊配属の憲兵や補助憲兵、軍属など一二〇〇名ほどが敗戦の十一月、武昌蛇山公園近くの元中華民国商招局の倉庫にあつめられ、武漢行営司令部・程潜大将の管轄下におかれた戦争犯罪人、いわゆる戦犯の取り調べである。蛇山公園の中腹、長江（揚子江）を見下ろすところには、唐代の詩聖、李白の詩にでくる黄鹤楼がそびえていた。

中国における戦争犯罪裁判は、蒋介石率いる国民政府に主権があつた時期と中国共産党の指導する人民政府に移った時期がある。国民政府による戦争犯罪裁判は、昭和二一（一九四六）年四月の北京軍事法廷における公判をかわきりに、同二四（一九四九）年、上海軍事法廷における判決をもって終了した。この間、北京、広東、台北、南京、漢口、徐州、済南、太原、上海、瀋陽でおこなわれた。⁽²²⁾

かれらが収容された倉庫には便所がなく、日本軍の他部隊が前にいたため、おびただしい人糞の堆積で足の踏み場もない状態であつた。さっそうかれらは、人糞を埋め、便所をつくり、入浴場、炊事場なども集めたレンガでこしらえた。倉庫の床はコンクリート、その上にアンペラを置き、シー

トを敷いていた。布団や毛布が支給されたが十分ではなかった。しかし、兵士にとっては一年半ぶりで布団にくるまった。また、携帯天幕を吊り下げて、各隊との間仕切りにし、冬の寒さを防いでいた。天井から大きなサソリが落ちてくることもあつた。

風呂をつくってはみたが、燃料を買う金もなく、二、三回使っただけ、あとは大雨の日が入浴代わりであつた。原田は、

酷暑の武昌収容所のスレート屋根をたたきつけて雨が降る。裸になつて軒から落下する滝の中で、入浴がわりで体を洗う。昔のような垢がぼろぼろはげ落ち、虱のための赤い斑点が、その下に一面に広がっている。⁽²³⁾とのべている。

食事は、一日二回、碗にわずかに米が盛られただけであつた。二〇〜三〇代の兵隊が圧倒的におおい。ほとんどが栄養失調状態になっていき、また疥癬患者が増えていった。捕虜たちは、毎日が食糧獲得との闘いであつた。ある日、原田はへびを捕まえ、皮をはぎ、生きキモをペロリと飲み込み、剥き身は干物として焼いて食べた、と島田は証言する。後年、原田はイトノ夫人に、「へび、ネズミ、カエルを食べられなかった者は、死んでいった」と述べた。また、原田は白菜の漬け物が好きだつた。それが原因かどうかはわからないが、体がフラフラな状態になったことがあつた。おそらく、回虫だろうと、谷本がザクロの根を掘って、それを煎じ飲ませたところ、回復したことがあつた。衛生状態が極端に悪かつたのである。戦犯収容所にいる間、かれらは労役に服し、道路補修にあたつたり、中国人難民のための宿舍建設にあたつた。暇なときには、うさばらしに麻雀をする者もいた。

戦犯調査は抜き打ちに実施され、容疑の事実の有無を紙に記入するものであった。相談させないために、私語禁止、何人もの中国国民党軍憲兵が監視するなかでおこなわれた。調査の項目は、

- 一、放火した事が有る者又はそれを見た事が有る者
- 二、強姦した事が有る者又はそれを見た事が有る者
- 三、殺人をした事が有る者又はそれを見た事が有る者⁽²⁴⁾

の三点であった。また、民衆へも新聞や壁新聞で周知され、被害にあった者、あるいはその家族の告訴を受理していた。放火をしたことのある兵士が心配していたところ、原田は八路軍がいたので放火したといえればいい、とひそかに助言をしたこともあった。国民党軍と八路軍はすでに敵対しており、放火したとしても罪状が軽くなると、判断してのことであつたらう。

原田をはじめ柳州から撤退した憲兵たちは、柳州から遠く離れた武昌にいたため、告訴をする中国人もおらず、また庶務班勤務の者は、直接中国人に危害をあたえていなかったのも、内心安心だったと、笹木はいう。原田が鹿寨鎮分遣所に配属のおり、笹木に任務の交替を頼んだのも、かれにとっては直接民衆と接する仕事よりも事務手続きを仕事とする庶務班を希望してのことであつたらう。取り調べは、漢口の軍事法廷でつづけられ、二度と戻らない者もいた。

捕虜たちは起床後、庭で中国国歌を歌い、国旗掲揚に参列、朝食は九時、昼食はなく、午後は作業など、そして夕食は午後四時ころ、午後六時に国旗降下に参列、そして、午後一〇時の消灯であった。毎日が同じように過ぎていった。しかし、昭和二年の年明けころから捕虜たちの心に微妙な変化が生まれた。それは上司である将校に対する反発と反感、また、日本へ帰国できるかどうか、皆目わからない状態のなかで、「すてっばちの空

気が皆の態度と目の中に」⁽²⁵⁾ あつたからである。

そうしたなか、英語通訳などをしていた井田准尉が神経衰弱のため炊事場で縊死する事件があつた。この事件を契機に、原田が毎夜、千人くらいの捕虜が寝ている中央に立って演説をはじめたのである。

世界各国の情勢は、民主化された中にあり、日本帝国主義の中で育つた我々には理解出来ない情勢下にある。我々は公平な裁判により、無事日本に帰れるから、早まって自殺等しないように……⁽²⁶⁾

かれの演説を隣で聴いていた笹木は、「そのとき、びっくり仰天した」と筆者に語ってくれた。「民主主義」だの、「帝国主義」だのという言葉をはじめて聞いたからである。

かれの演説により、自殺を思いとどまったひといたようである。しかし、こうした演説は、別棟にいた将校たちの耳にもはいる、「大六やめろ」との中止命令がでるが、下士官からは「大六つづける」との声援もあつた。青春の八年間を軍隊生活に奪われ、二九歳になっていた原田は、敗戦を契機に「何か世の中に役に立つようなことをしたい」と心のなかで悲痛な叫び声をあげていたが、考古学者になることを夢見ていた青少年期を想い、その日からザラ紙に細字で記録しはじめた。記録といっても、手元に一個の資料があるわけではなく、一冊の書物があつただけではない。考古学への郷愁だけが、じつとさせていなかっただけである。⁽²⁷⁾

夜遅くまでかかって執筆したものは、『日本論』という論説であつた、と石田は記憶している。この『日本論』を愛読した石田によると、その内容は、「日本民族の渡来から、神代大和朝、その起源などから説き日本人の姿を考古学的・語源学的・科学的見地から例証を引いては解剖を加

(28)へ」るもので、真の日本人の究明、これまでの思想や宗教、神道の非科学性にメスをいれるものであったという。おそらく、これは復員後の昭和二二(一九四七)年に執筆した『日本国家の起源』の基礎になったものであろうか。

一月のある晩、酒の勢いも手伝ってか、原田ひとりで将校室にのりこんでいったことがあった。笹木らは心配し、後から見にいくと、頭から血を吹きだし、倒れている原田がいた。五針を縫う大怪我であった。

单身将校室にのりこみ、収容所内の自由と民主主義の徹底、将校たちの封建的思想の払拭を要求し、はては天皇制批判まで口にだしたため、武昌憲兵隊長の坂田少佐が野球バットで殴ったのである。

この事件で、かれは二〇日間の謹慎をいい渡されたが、こんなことに負ける原田ではなかった。謹慎あけに、頭に白い包帯を巻いたままさらに、

将校は階級章を外して、我々と一緒に労役に服せ。階級章は無くとも、日本人居留民は整然とした組織の下に内地に帰った。負けた日本軍には階級章はいらない。(29)

と、演説をはじめたのである。これに対して、将校は、階級章をはずすと統制がとれなくなる、といって、はずそうとしなかった。そのため、かれは漢口に労役に行く笹木に、『管理所に於ける日本軍国主義と階級章について』と書いた原稿をわたし、新聞社への投稿をたのんだ。笹木は『正義日報社』に投稿し、翌日には中国語訳されて、その原稿は記事になった。内容は、『敗戦国の日本管理所に於て、未だに階級章をつけて支配している云々』(30)というものであった。だいぶ反響があり、その後、中国国民党軍の命令により、全員の階級章がはずされたのであった。

同年六月ころ、笹木らは武漢在住の日本居留民の引き揚げたバラック小

屋解体に従事し、部屋にのこされた『哲学概論』や『西洋哲学史』、『資本論』を入手した。収容所に運び、読んでみると、原田が、

西洋哲学史を先に読み、哲学の概念が分った上で、マルクスを読んだ方がいいよ。(31)

と助言したという。かれは、以前にマルクスを読んでいたらしい。最初の召集で、かれは中国東北地区の国境地帯(ソ満国境)に派遣されるが、そのとき内地の友人たちから送られた手紙が今ものこっている。そのなかに「マルクスとトルストイやはり僕はトルストイです」と返書した友人がいる。このことから、原田は召集前に「国禁の書」を読んでいた可能性がある。兵営での原田は、演習からめどると哲学や歴史学関係の本をてあたりしだいに読んでいた、と黒木は証言する。

同月、戦犯調査がすすむなかで、伍長以下の補助憲兵、軍属約八〇〇人の復員が決定した。原田や笹木らは、軍曹になっていたため取りのこされ、収容所は五〇〇名ほどに減った。

そのころ、中国国民党と中国共産党との間で政治的対立が先鋭化し、漢口市内でも国民党軍の将校が暗殺された事件があった。六月二六日、とうとう国共内戦状態に突入した。

こうした状況のなか、中国国民党政府による軍事法廷は、のこされた五〇〇名ほどの氏名と経歴を書き、「この日本憲兵は、まだ残留しているから、被害を受けた者は速やかに告訴して来るように」という内容の立札を市内の要所に立てたものの、告訴するものはなかった。

そうこうするうち、九月から一〇月にかけて、捕虜たちは漢口の道路改修の労役に服し、わずかばかりの日当を蓄え、復員の準備をはじめた。

結局この漢口裁判では、七九件一六二人の裁判がおこなわれ、死刑七名、

うち四名が憲兵隊であった。ほかは無罪をいわたされたのであった。

四 復 員

一〇月二五日に復員命令がだされ、翌日漢口へむかった。武漢行營の検査が終わると、訓辞があった。

軍国主義侵略戦争のために中国に派遣された諸子は、今復員することになった。日本の侵略の為に中国の民衆は家を焼かれ、土地を追われ、家財を失ひ多数が虐殺され、……平和は到来し、過去八ヶ年の苦しみから救われた。……諸子は速かにこの軍国主義を放棄して復員の上、世界の平和、日本の復興のため努力せられんことを望む。⁽³⁴⁾

というような内容であった、と石田は回想する。

一行は、乞食同然の姿で上海にむかい、江湾鎮の戦犯収容所にはいった。ここでひと月ほど滞在して、いよいよ「日昌丸」の待つ飯田棧橋にむかって最後の行軍がはじまった。着の身着のままの行軍であった。乗船前、中国軍少佐から点呼があり、荷物検査となった。原田の名は、「ハラダタロク」とよばれ、おまえは「タロク」だったのか、と笹木が茶化すと、苦笑する一幕があった。

このとき、湘桂作戦時に描いたノート数冊、あるいは収容所で執筆した『日本論』のノートを持ち帰ることができたのか。現在、イトノ夫人が原田の生前のまま、書斎や書庫の本、雑誌、原稿、ノート類を大切に保管されている。筆者がひとわり調べてみたが、このなかにはなかった。おそらく、乗船前の検査で没収されたのではないだろうか。

乗船中、笹木は同期生たちに名と住所を書いてもらうが、その第一頁を、

原田大六に書いてもらったという。みせられた手帳には、大きな字で丁寧に書かれたかれの名があった。前途に明るさを感じるのびやかな筆跡であった。

そのとき、原田は笹木に、

考古学者になって、いつの日か、おまえの故郷にある東北大学で講演をすることもあろう。そのときは、会おう。⁽³⁵⁾

と、大見得をきいたという。三晩かかり、船は佐世保についた。上陸し、宿舎にはいると防疫班が待っており、予防注射や頭からDDTの白い粉を振りかけられた。入浴をすませ、青畳の上にみな大の字になった。

昭和二年一月二〇日、引き揚げ証明書が手渡され、ここに中支那派遣憲兵隊は解散した。佐世保からそれぞれ懐かしい故郷にいさんで帰っていった。原田は別れ際、谷本に、

文学博士になる。⁽³⁶⁾

といい、そこには、軍国主義のくびきから解放され、銃を捨て、考古学という学問の世界にいともうとする目をギラギラさせた青年の姿があった。

五 教習隊同期生からみた原田大六

教習隊七期生のうち、原田大六と湘桂作戦とともにし、かつ武昌戦犯収容所で一緒だったかれらは、原田大六をどのようにみていたのであろうか。石田はつぎのように書きのこしている。

私達の同期生の彼の原田大六（台勅）は特異な存在として隊内の誰知らぬ者もない男だ。ジャーナリスト特有の鋭敏な神経と時代感覚と熱

情が彼の性格で、又諧謔性に富んでいる。その明晰緻密な頭脳に敬服していた……彼は酒を呑んでは奇異な行動をするので一部の人は一笑に附し、彼を誇大妄想狂として顧りみなかったけれども、少く共私は大いに啓蒙されたものだ。⁽³⁷⁾

また、笹木は、最初はよくわからなかったが、収容所に入ってから、かれとともに生活したり、活動をするなかで、かれの偉さがわかったという。だからこそ、復員船のなかで最初に手帳に名を書いてもらったのだ、と筆者に語った。ただ、憲兵としての仕事にかんしては、「憲兵の仕事は余りしていなかった」⁽³⁸⁾と語っている。

「酒を呑んでは奇異な行動」と石田は書きのこしているが、このことにかんして、笹木にもおもしろい体験があった。どこでのことか、もう記憶は定かではないが、原田が民家を探索したとき、酒のはいった甕を押収、それを背負いながら、飲み歩いたというのだ。酒好きであった。

戦後、原田は戦争時の体験をひとにあまり語らなかった。戦地でのこと、とくに「憲兵時代」は、新聞記者の質問に簡単にこたえたことがあるくらいで、最初の召集時に中国東北地区の東寧で兵役をともにし、戦後も親しくしていた黒木にもあまり話さなかった。ただ、その黒木は、「敵方の捕虜や村人の命も危ない処を大分助けてやったぞ」⁽³⁹⁾といっていた原田の言葉を書きのこしている。

戦後、笹木らは「鐘山七期生会」や「漢口会」を結成し、交流を復活させたが、案内を差しだしても、原田はまったく参加しなかった。学歴がなく、考古学研究と格闘していた時期であり、「一〇年若かったらなあ」と筆者に語ったことがあったように、戦争に奪われた八年間を取り戻すかの

ように、必死だったのかもしれない。

原田はひとのことを聞かない頑固一徹のところがあった。かれは戦地での活動を「国のために尽くしたのだろうか」といって、「軍人恩給はもらわんぞ」と拒否していた。⁽⁴⁰⁾死と直面したベッドのなかで、のこされるであろう夫人のために最後に判を押したのであった。

本稿では、「憲兵時代」の原田に焦点をあてた。かれの行動には、戦後、「官学」に果敢に挑戦し、「ケンカ大六」と恐れられたかれの原点をみることができる。決して、妥協せず、理不尽な権威に対しては、自分ひとりでも敢然と立ちむかう勇氣と熱情があった。かれの終生の研究テーマである「日本国家の起源」は、青春を奪い、おおくの死者をだし、他国におおくの損害をあたえた日本国家、そのものの起源を、青少年期に好きだった考古学を通して解明することがその根底にあったのではないだろうか。

最後になったが、イトノ夫人をはじめ笹木幸治氏、黒木正男氏には、貴重な資料の提供をいただいた。また、湘桂作戦時の行動について、石田静夫氏の手記『湘桂公路』に負うところがおおい。記して、感謝申し上げたい。

註

(1) 原田大六先生後援会編 一九七六『原田大六論』七〇六頁。

(2) 原田大六先生後援会編 一九七六『原田大六論』五五四頁。原文は、一九七五年に雑誌『新評』に掲載された「異色人物追跡ルポ 邪馬台国フームを一刀両断！在野の古代史の大物 原田大六とは こういう男」から。

(3) 朝日新聞山形支局 一九八五『聞き書き ある憲兵の記録』五六頁、朝

日新聞社。

- (4) 全国憲友会連合会編集委員会 一九七六『日本憲兵正史』三一～三二頁。
- (5) 註(3)の一二三頁。
- (6) 斎藤市平 一九四一『憲兵志願者案内ト採用試験問答』九頁、尚平館。
なお、この書の初版は一九二八(昭和五)年である。
- (7) 原田大六 一九六六『実在した神話』三八～三九頁、学生社。
- (8) 防衛庁防衛研修所戦史室 一九六八『戦史叢書一号作戦へ2 湖南の会戦』一九～二〇頁、朝雲新聞社。
- (9) 註(8)の一一頁。
- (10) 藤原彰 二〇〇二『中国戦線従軍記』七六～七七頁、大月書店。
- (11) 註(8)の四八頁。
- (12) 島田源吾 平成元年『戦塵』七～八頁。これは原稿用紙に手書きされた手記。
- (13) 石田静夫 一九四七『湘桂公路』四頁。これはノートに手書きされた手記。
- (14) 註(10)の九八頁。
- (15) 註(10)の一二二頁。
- (16) 笹木幸治 一九九三『軍隊の想い出』『遙かなり中支戦線』一八三頁。これは、歩兵第一〇四連隊第四中隊の戦記。
- (17) 註(13)の四六頁。
- (18) 藤原彰 二〇〇一『餓死した英霊たち』一一五頁、青木書店。
- (19) 註(13)の五六頁。
- (20) 註(16)の二六三頁。
- (21) 註(16)の一六四頁。

- (22) 東京裁判ハンドブック編集委員会編 一九八九『東京裁判ハンドブック』一二六頁、青木書店。
- (23) 註(7)の三八頁。
- (24) 註(12)の八〇頁。
- (25) 註(7)の三七頁。
- (26) 註(16)の一七〇頁。
- (27) 註(7)の三九頁。
- (28) 註(13)の七二頁。
- (29) 註(16)の一七〇頁。
- (30) 註(16)の一七一頁。
- (31) 笹木幸治氏の談話。
- (32) これは、横澤政治氏が昭和一五年八月一〇日付けで、「戦地のロマンストへ」と題して原田大六に送った手紙の一節である。
- (33) 註(16)の一七一頁。
- (34) 註(13)の七七～七八頁。
- (35) 笹木幸治氏の談話。
- (36) 谷本兆三氏の談話。
- (37) 註(13)の七二頁。
- (38) 註(16)の一六七頁。
- (39) 黒木正男 二〇〇一『わたしのときをこえて』一九頁。
- (40) 註(39)の一九頁。